

第二部

夜のこゑ

——札幌時代の伊賀上先生の俳句

明

吉田 明

吉田

細谷源二の句に

地の涯に倅せありと来しが雪

というのがある。昭和三十年以前、本州から北海道へ渡ってきた人たちはこんな思いを味わったにちがいない。それも今は昔のことになってしまったが。

二十五年におよぶ札幌生活を了えて伊賀上先生が東京（正確には伊豆といった方がよいのだろうか）へ帰られることとなった。

四十代半ばの脂の乗りはじめた時期、どんな思いで先生は札幌へこられたのか。今、その思いは充分みたまされたであろうか。所詮、人生はいつも途上にすぎないことを考えると、目標と言い期待と言ってもそれが果たされてしまうと、まことにあっけなく儚いものである。

すくなくとも先生はほほえみながら、この四分の一世紀のご自分の道程を大きく肯定しておられると私は確信している。

私は札幌へ来て丸三年にしかない。その間、先生とじっくりお話したのは二、三回にすぎず、あとは中央棟二階のエレベーターのところで立ち話をしたくらいである。かえりみてもっとお話を伺って置けばよかったとの悔もある。それでもしかし、心の一番奥のところで先生とはお互いに深い共感をもって触れ合ったように思う。立ち話というものの、存外、本音（ホンネ）が出るものである。

このたび、木村真佐幸先生から伊賀上先生の俳句について思うところでもあれば書かないかとの暖かいおすすめをいただいた。

ところが伊賀上先生作品について私は一句か二句知っているだけで俳句作家としての全容は見当がつかなかったのである。にもかかわらず木村先生のおすすめを一も二もなく承諾してしまった。

木村先生の下さった資料は、伊賀上先生が属しておられた俳句同人誌「蜜」の昭和四十三年から五十二年の十年間のうち、先生の作品の載っている部分の抜刷七号分位、句数にして合計五十句ほどである。

五十句で一人の作家の作家論はとも書けないのは当然だが、しかしまたこの五十句に見事に俳句作家伊賀上正俊（泉）の特色が出ていることも事実である。

昭和四十三年といえは先生が札幌にこられた翌年で、それから十年、かなり句作に力を入れておられたことが推測される。昭和五十二年は「蜜」主宰の油布五線氏が病気がちのため主宰を退いた年で、先生の句作意欲もなんらかの理由で一休止された時期ではないかと思われる。そしてそれ以後、俳句を作るより外から静かに見られる立場になられたものと想像される。

燃えていた十年間だけに句に張りがあり、対象の把握、表現にも意欲的でわかかわしくみずみずしいところがある。年齢からみても四十歳代の半ばから五十歳代の半ばという人生の実りの季節でもあった。

まず春の句から

雑木山芽ぶき満月ころげ出づ

落葉松の芽吹く直線ねむたい火山

春暁の夢の一点うすみどり

細めたる眼に春雪の粒太し

明

公園に湧ける喝采風のリラ

一句目、満月がころげ出たという把え方はすこし大仰にも思えるが、早春の大きな月が低く近く見えた時の驚きが素直にわかる。二句目、からまつの芽吹きの色とのっそりと横たわる火山のコントラストを「ねむたい火山」と字余りにして浮かび上らせている。三句目、ふと目覚めた春暁、もう明け方でも寒くない。覚める前の夢のひとつところはたしかにうすみどりであった。青春の揺曳がここには感じられる。四句目、いかにも春の雪である。大粒の雪だけでも、雪と別れる日も近い。そんな名残惜しさもこの句には出ている。最後の句、大通り公園あたりの若者たちの屯ろから喝采が湧く。リラを風が吹きすぎて行く。（北海道では、リラは初夏に花ひらくが、歳時記の分類に従って春の句とした。）

すがやかな句である。作者の胸中もリラの明るい色に満たされている。

郭公に明けて独りの一つの灯

辻に若葉電車が曲がりたくて来る

この二句は夏の句である。前の句は西岡四条十一丁目の校宅での作か。あのあたりは今でもちかぢかと郭公を聞くこ

とができるから、この句の詠まれた昭和五十年頃はあたりの家数もすくなく淋しさもひとしおであつたろう。普通は「独りの灯」か「一つの灯」とだけ詠むべきところ「独りの一つの灯」と重ねているところ、それだけ独居の思いが深かったにちがいない。後の句、電車が曲がりたくて来ると電車にも意志があるように詠まれてみると、札幌の市電の顔が人間の顔を持っているように思えてくる。このほかに無季の句として

窓に来て雨滴それぞれに森が居る

があるが、夏の「季感」がにじみでている作だ。「森が居る」も独特な把握で、このような場合「森があり」とするのが普通なのに作者はそれでは満足できなかったのであろう。作者はこのほかにも擬人法を駆使し、繊細に見えながら意外に強靱な句風を堅持している。

行きさうにしてとどまれる蜻蛉かな

山なして新ジャガ秋の日にあそぶ

乾く稲架丘は星座へ昼ねむる

曼珠沙華了りしあとの河流る

満月がたしかに虫喰ひ葉を透かす

秋の五句である。そしてこの五句に伊賀上俳句の真骨頂が凝縮しているということが出来る。第一句の写実の目の確かさと心のナイーブさ、第二句はいきいきとあかるく新鮮である。第三句は複雑な心象を技倆を駆使して玄人好みの巧みな句に仕立てている。中味をバラバラにしては味気ない散文になつてしまふが、ときほぐしてみよう。「丘をなす刈田のあちこちに稲架（ハザ）が見える。晴れる日がつづいて掛稻もよく乾いている。この分では夜は星空でいくつもの星座が丘を覆うであろう。いま丘は眠っているように静かだ。それは夜の星座を待つ思いで眠っているといえるかも知れ

ない。』第四句は赤色の彼岸花の終った広い野原を貫くように太く流れる川に焦点をあてて力強い。第五句は第三句同様、この作者独特の感覚と描法の句で、私には作者の心奥の孤独感が感じられてならない。「月光、しかも満月のひかりが、名もわからぬ雑木の虫喰い葉をまぎれもなく透かしているよ」と提示することは微に入り細をうがった写生というよりは、作者の心中の埋まらぬ淋しさを誰に言うことなく洩らしているのだと思うのである。

ハンドルをきるたび別の雪嶺立つ

雪山を越え来し材木の断面

枯れ葦の中の光りを鳩すゝむ

明

さゝめ雪時計塔より夜のこゑ

吉 田

これら四句は冬の句である。一句目は誰もが経験することで説得力のある句である。二句目は破調で放り出すようにぶつきらばうに見えるが、説明調の句よりも迫るものがある。「材木の断面」というだけで、それがどうなっているか、状態の説明がまったく省かれている。それがかえって鑑賞者の想像をあれこれと刺戟する。三句目、ひかりの中をすゝむ鳩（かいつぶり）の可憐な姿が彷彿とする。一幅の淡彩の画を見るようだ。最後の句、伊賀上先生の句としてはこの句が人口に膾炙している。札幌の俳句としてどんな俳人の作と比肩してもひけをとらないものだと思う。

伊賀上先生の句歴は長い。旧制松山高校時代からだからもう五十年になる。おそらく俳句に己れをかけようとされたこともあったにちがいない。木村先生から頂戴した資料は伊賀上先生の句業の一斑にすぎまい。一斑を見て全豹をト（ボク）すことは伊賀上先生にとって迷惑なことと思うが、どうぞおゆるしねがいたい。

丁度一年前の今ごろだった。先生と中央棟玄関のところで立ち話をした。先生は正門から中央棟までの両側のななかまどと菩提樹の並木が好きで、来年はあの菩提樹の花の咲くのを見ることできないと思うと淋しいと、しみじみ言わ

れた。私もまたキャンパスで先生と立ち話をするのがもうできないと思うとほんとうに淋しい。

(平成四年三月二十一日稿)